

「ツ抜け」

最近、家族で釣りを始めた。防波堤から糸を垂らし、アジが回遊してくるのをじっと待つ。しかし、なかなか釣れない。ほかの人はどれぐらい釣れているのだろうか。スマホで釣り関連のブログを読んでいたときに会ったのが「ツ抜け」ということばだ。

「ツ抜け」は「つ抜け」とも書き、魚を10匹以上釣ったことを意味する、いわゆる釣り用語だ。「ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いつつ……」と数えたとき、とお(10)になると「つ」がつかないから「ツ抜け」と呼ぶ。「なんとか“ツ抜け”した」「“ツ抜け”を達成した」といった形で使われているようだ。釣った魚を数える場合、普通は「匹」や「尾」を使うのに、「ツ抜け」と表現するとはおもしろい。

ものを数えるときに使うことばとして、「つ」はユニークなことばだ。幅広く使えるという点では「個」とも似ているが、「個」と違って小さな子どもの年齢や、「3つの夢」「2つの可能性」など抽象的なものにも使える。

一方で、「つ」の前につくのは、現代では1から9までの数に限られる。読み方も、「ひと、ふた、み……」と和語(やまとことば)

系で読み、漢語系の「いち、に、さん……」の読みはしない。和語系の数の読み方が漢語系の読み方に押されて、衰退しているといわれるなか、和語系の読みをする「つ」は、なかなか貴重な存在だ。

そういえば私の祖母は、急いで何かの数を数えるとき、「いち、に、さん、し」ではなく、「ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、なな、やあ、ここのつ、とお」と数えていたが、最近、こうした数え方を耳にする機会もめっきり減った。調べると、小学生の教科書に「数えことば」として載っているようだ。小学3年の息子は知っているのだろうか。試しに「ひい、ふう、みい」の続きを聞いてみた。

「前に習ったよ。確か、ひい、ふう、みい、よう、うー、たつ、み……」

「うー、たつ、み？」

息子よ、途中から数ではなく、^{えと}干支になっているぞ。いずれにせよ、「ひい、ふう、みい」が、息子には日常のことばでないことは間違いないようだ。

なつかしさすら感じる「ひい、ふう、みい」の響き。たまには息子とこたつに入って、みかんでも数えてみようか。

中島沙織(なかじま さおり)